

極私的「テレビ人形劇」史

— 画面のこちら側から —

高橋 一元

時計代わりだった連続人形劇

テレビ人形劇についてのもっとも古い記憶はNHKの『チロリン村とくるみの木』だ。当時私は母の実家の向かいにあった保育所に預けられていた。その保育所の給食調理員をしていた祖母とともに毎日祖母の家に帰り、母が仕事を終えて迎えにくるのを待っていた。テレビで『チロリン村とくるみの木』見ていると、番組が終わるころ、母が来るのだった。それはやがて『ひょうたん島』に替わり、私は小学生になった。道徳か何かの時間には教育テレビで人形劇（たぶん『大きくなる子』の「トンちゃん」「トラくん」あたり）を見せられた。だが、夕方のテレビを見る場所は祖母の家から自宅へと変わった。私は「鍵っ子」になったのだ。やがて近所の子どもたちと遊ぶようになると、テレビを見る場所はその子らの家になった。なかでも近所の指物屋の子の家には、しょっちゅう上がり込んで遊んでいた。そこには屋根付きの広い作業場兼材料置き場があって雨の日でも遊べる上に、木片や棒切れ、鉋屑など遊びの材料にも事欠かず、職人さん（道具に触らず仕事の邪魔をしない限り、子どもたちには寛容だった）が出入りしていたため開放的だった。天気の良い日は明るいうちには外で遊び、暗くなると誰かの家で遊ぶ。誰の家でテレビを見ていても、

『ひょうたん島』を見終わると解散するのだった。

テレビ人形劇は見ていなかった

だが、『ひょうたん島』の後番組であり少し遅れた放送時間になった『空中都市008』も『ネコジャラ市の11人』についても、見ていたという記憶がほとんどない。引越して交友関係が変わったこともあるが、遊び方が変わったり、塾に行ったり（小5から小6にかけて一年ほどそろばん塾に通った）で、もうその時間にテレビの前にはいなかったのだと思う。中学生になるとさらにその時間は減った。さらに放送時間が下がった『新八犬伝』は見たことはあるし、坂本九の「因果は巡る糸車」や「本日、これまで！」という台詞や難しい熟語の解説などには覚えがあるのだが、まとまったストーリーの記憶がない。もちろん当時ビデオレコーダーなどなく、毎日続けて見ることはできない。「連続人形劇」はストーリーも繋がらず、面白くなかった。高校生になって、正課のクラブで人形劇を始めた（だから、当然人形劇に興味を持っていた）のだが、その年に始まった『真田十勇士』については全く記憶がない。（正課でない）部活や生徒会などの活動が忙しく午後7時前に家に帰ることが減多になかったからだ。以後のNHKの連続人形劇についても同じである。

子どもたちにとって何が面白いのか

では、小学校高学年以降、テレビで人形劇を見ていなかったのかというと、そうでもない。民放で放送された『キャプテン・スカールレット』や繰り返し再放送された『サンダーバード』（初放送はNHK）はしっかりと覚えていいる。「ウルトラ」シリーズに通じるような（実際は『サンダーバード』が「ウルトラ」シリーズに影響を与えたのだが）ストーリーやメカ、特撮を駆使したリアルな映像は、NHKの人形劇とは違う魅力を持っていた。そしてそれらは、1時間1話完結（あるいは30分2話で完結）で、見ることができる時間帯で放送していた。15分という短い時間で月曜から金曜まで毎日見なければストーリーがわからないNHKの連続人形劇は、敷居が高かった。

といて、時間が合わなかったという理由だけで連続人形劇を見てこなかったかという、それだけではないような気がする。民放では人形劇の番組はほとんど作られなかったが、例えばアニメ番組。1963年の『鉄腕アトム』以来、毎年たくさん番組が作られ、海外からも輸入された。ロボットをはじめとするSFもの、忍者、妖怪、ヒーロー、スポーツ、ギャグ、超能力、恋愛、魔法、世界の名作。およそ子どもが好きなジャンルをすべて網羅していた。66年には女の子が主人公の『魔法使いサリー』が放送された。NHKの連続人形劇で単独の女の子が主人公になったのは79年の『プリンプリン物語』のみである（ゆえに、当時小学生の女の子からは絶大な支持を得ていた）。連続人形劇のほとんどは冒険ドタバタミュージカルか歴史物で、コンテンツが少なかった。なるほど歴史物はストーリーががちりしているし、人形の見栄えも良いのだが、アニメ、特撮もの、実写ドラマ、数多く生み出された子ども向け番組のなかのニッチな選択肢の一つになっていた。

極私的「テレビ人形劇」史

なぜ人形劇にはスターがないのか

2015年の夏、アメリカ・コネチカット州のコネチカット大学で開かれた“National Puppetry Festival 2015”を訪れた時のことを、私はFacebookにこう書いた。

National Puppetry Festival 2015、2日目の最後は、さながら Sesame Street 祭。男声コーラスグループによる主題歌・挿入歌の合唱と影絵の上演。続いて「セサミストリート」の多くのキャラクターの生みの親である Jim Henson の娘 Cheryl Henson による “Celebrating Jim Henson and the Art of Puppetry”。後半は “Love Birds: An Evening with Carroll and Debbie Spinney” ということでビッグバードのマペット操演者 Carroll Spinney が、自身を描いた映画 “I Am Big Bird: The Carroll Spinney Story” の上演。最後にオスカー（これも彼が演じていた「セサミストリート」のキャラクター）を手に Carroll Spinney その人が妻 Debra とともに登壇。会場全体がスタンディングと拍手と歓声で迎える。会場からの質問に答えながら、しばしばオスカーにしゃべらせるのがまた巧い。「セサミストリート」がアメリカの人形劇の中でどんなに大きな存在なのか、レジェンドを目の当たりにしてしみじみ感じた夜でした。

人形劇のフェスティバルなので、もちろんその場に居たほとんどが人形劇関係者だったのだが、ジム・ヘンソンやキャロル・スピニーが紛れもなくテレビネットワークで成功したスター（二人とも番組でエミー賞を受賞、スピニーはグラミー賞も受賞している）で、人形劇関係者のみならず多くの人から愛され尊敬を受けている存在であることを知って、彼我の人形劇に対する評価の違いに改めてショックを受け

極私的「テレビ人形劇」史

た。残念ながら日本のテレビ人形劇の遣い手にスターはいない。スターがないからテレビ人形劇がメジャーにならないのか、テレビ人形劇がメジャーにならないからスターが出ないのか。

文案は太夫、三味線、人形遣いの「三業」で成り立つと言いながら、口上が「相勤めます」と紹介するのは太夫と三味線だけである。それでも吉田玉男、文雀、簗助らは人間国宝になり、一般にも知られるようになった。だが、現代人形劇ではどうだろうか。残念ながらどの劇団も役者（遣い手）個人を売り出そうとはしていないようである。ではテレビ人形劇では？

『ひょっこりひょうたん島』『ネコジャラ市の11人』の脚本を担当した井上ひさし、山元護久とともにその後も放送作家として活躍し、特に井上は小説家、劇作家としても国民的作家となった。『新八犬伝』『真田十勇士』の人形美術を担当した辻村ジュサブロー（現・辻村寿三郎）は一躍人気人形作家となり、人形の世界にとどまらず、各方面から注目される総合的なアーティストとなった。だが、それ以降の作品ではすでにアニメーション作家、人形作家として高い評価を得ていた川本喜八郎や人気劇作家、脚本家である三谷幸喜を起用している。人形の声は人気俳優かベテラン俳優が多く、話題作りのためかアイドル歌手や司会として時の人気者（坂本九や紳助・竜介）が起用されたこともある。遣い手はどうだろう。名前すら出ないこともある。一昨年、『プリンプリン物語』がNHK・BSプレミアムで再放送される

のに先立って放送された特集番組『復活！プリンプリン物語』伝説の人形劇『ここがスゴイ！』では操演（人形使い——傍点筆者）として伊東万里子が紹介された。『チロリン村とくるみの木』から『人形歴史スペクタクル 平家物語』まで7作品で人形を遣っていた彼女ですら、一般には名を知られていない。約20年間『できるかな』のゴン太くんの「中の人」だった故・井村淳は日本のキャロル・スピニーと呼んでもいい方だけれど、やはり知名度は低い。人形遣いはや

はり影の存在なのか。テレビ人形劇では、人形遣い以外にスターが起用されることはあっても、人形遣いのスターを生み出す気はなかったのだ。

これからのテレビ人形劇

NHKは2009年、教育テレビ50周年を記念して『人形歴史スペクタクル 平家物語』以来14年ぶりに『連続人形活劇 新・三銃士』を制作・放送した。脚本・三谷幸喜、キャラクターデザイン・井上文太で、同じ組み合わせで5年後には『シャーロック ホームズ』を放送した。良く言えば今風、美術も脚本も小綺麗にまとまっているが、現在の子どもたちに訴える力があつただろうか。

昨年には前述のように『プリンプリン物語』が再放送された。他の作品もぜひ再放送して欲しいものだが、残念ながら『プリンプリン物語』以前の作品は映像がほとんど残っていない。当時、業務用ビデオの映像が残っていない。これが人形劇（のみではないが）の再放送を不可能にしている。スタッフや出演者からの提供（前述の伊東万里子さんが自分の演技のチェックのために録っておいたいくつかの作品のビデオが寄贈されたという）やNHKの番組発掘プロジェクトによって現在も映像が集められている。ぜひ再放送を（地上波で子どもたちの見やすい時間で）実現させて、オールドファンのみならず現代の子どもたちにも人形劇のおもしろさを伝えて欲しいものである。連続人形劇が放送されていた頃と現在とでは子どもたちを取り巻く状況はずいぶん変わっている。当時の子どもたち（私）は文化に飢えていた。飢えていない、むしろ偏食で飽食の現在の子どもたちが指を動かすのか、見てみたい。

2009年に台湾に行ったとき、桃園空港で霹靂布袋戲（ピリプー

タイシー)のデモ上演と展示を見た。それは非常に美しい人形を使いSFX(特殊効果)やCGを駆使しスピード感あふれる動きとカメラワークで派手なバトルと同時に細かい心情をも描く、今までに見たことがない人形劇だった。こんな人形劇を日本でも見たいと思っていたら、2016年、日本・台湾共同制作による『Thunderbolt Fantasy 東離劍遊紀』が放送された。社会現象にもなったアニメ『魔法少女まどか☆マギカ』の虚淵玄が原案・脚本・総監修、キャラクターデザインを虚淵の所属会社のニトロプラス、操演・撮影は霹靂國際多媒體股份有限公司。造形アドバイザーにグッドスマイルカンパニーが参加し、布袋劇人形をより日本に受け入れやすい形にするなどの工夫も多く施された。古代中華的世界観をベースにした本格的な「武侠ファンタジー」で、深夜アニメ帯で放送され、人形劇体験のない、あるいはNHK教育テレビ風人形劇しか知らない若者を驚かせた。2017年には劇場上映作品も公開、2018年には続編も放送された。できればもっと早い時間帯で放送して、多くの人に見て欲しかった。テレビ人形劇に対するイメージが変わったかもしれない。

最後にもう一つ。これは人形劇ではないのだが、2016年からNHK・Eテレで放送されている『ねほりんぱほりん』が面白い。「人形だから話せる!?人形でしか話せない!?人形劇×赤裸々トーク」をコンセプトとして制作されているのだが、モグラの人形ねほりん(声・山里亮太)とぱほりん(声・YOU)が聞き手となり、ブタのぬいぐるみに扮した「訳ありゲスト」を招いて、トークを展開する。つまり人形を使うことで、素では訊けない「そんなこと聞いちゃっていいの?」という話を、これまた顔モザイクの代わりに人形を使ってゲストが話すという、まさに人形の特性を生かしたNHK・Eテレならではの番組なのだ。そしてこの人形操作が絶品。まるで本人が語っているかのように表情豊かに動く。ああ、こういう人形(劇)もありだなと思わせる。

極私的「テレビ人形劇」史

まとまりのない文章になってしまったが、テレビ人形劇を見てきた者としてあれこれ思うことを書いてみた。人形劇を愛するものとしてはテレビで良質の人形劇をもっと放送して欲しいし、できるだけ多くの人に見て欲しい。特にNHKはこれまでの「人形劇資産」を有効に活用して欲しい。それが、「人形劇は子どものもの」という少なからぬ人たちが持つ概念を変えることや、生の舞台への興味に繋がることを願っている。できることなら、人形劇と人形遣いの地位が高まることも。



『Thunderbolt Fantasy 東離劍遊紀』 ©Thunderbolt Fantasy Project